

研究主題

重度重複障害児との関わりについて

～よりよいコミュニケーションの確立を目指して～

要約： 重度重複障害の特性を正しく理解した上で、的確に生徒の実態を把握し、その実態に応じたコミュニケーション手段として、AAC（Augmentative and Alternative Communication）の活用を検討した。その結果、生徒の実態に応じたコミュニケーションブックを作成し、活用することで、生徒のコミュニケーションする力を広げることができていることが分かった。また、生徒の特徴を記したサポートシートの活用は、いろいろな人との実感のあるコミュニケーション経験において有効であることも分かった。さらに、重度重複障害児と関わる時の教師のあるべき姿勢や、障害の実態に応じたコミュニケーション手段の選択の視点について理解を深めることができた。そして、実際の生活の場における「伝えたー伝わった」という、実感のあるコミュニケーションの成功体験の積み重ねこそが、よりよいコミュニケーションの確立のために必要であることが分かった。

キーワード： 重度重複障害 実態の把握 AAC コミュニケーションブック
サポートシート 実感のあるコミュニケーションの成功体験

I 主題設定の理由

肢体不自由養護学校では、運動面の困難性や、知的に障害があったり、音声言語がないなど重複した障害のある児童生徒が多い。実際、石川県立養護学校には、重複障害のある児童生徒が全体の80%を超えるという高い割合で在籍している。（平成17年5月現在）また、医療的ケアを必要とし、常に健康面に細やかな配慮を要するような児童生徒も在籍するなど、障害の程度も重度化している。しかし、どんなに障害の重い児童生徒でも、それぞれが何かを感じ、思いを持っているはずである。このような様々な困難性のある重度重複障害児とのコミュニケーションをどのように考えるか、そしてどのように関わっていくのかは、肢体不自由養護学校に勤務する上で大きな課題のひとつである。そこで、重度重複障害を正しく理解し、その特性に応じた関わりや支援のあり方について学び、よりよいコミュニケーションの確立のための指導に関する専門的な知識、技術の習得を目指したいと考え、テーマを設定した。

II 研究の目的

重度重複障害の特性や、コミュニケーションの専門的な知識を学ぶことで、重度重複障害児との関わり方について理解を深める。また、実践授業を通してよりよいコミュニケーションの確立に対する方法や、効果的な支援、指導のあり方を探る。

III 研究の方法

- 1 重度重複障害の特性について学ぶ。
 - ・文献により重度重複障害の特性の理解を深める。
- 2 コミュニケーションについて学ぶ。
 - ・コミュニケーションについて文献をもとに学び、さらに、重度重複障害児とのコミュニケーションにおいて大切となる視点について理解を深める。
- 3 心理アセスメントについて学ぶ。
 - ・心理アセスメントについて、文献をもとに理解を深

める。特に重度重複障害児の発達を明らかにするために有効な心理アセスメントについて調べる。

- ・実践授業対象生徒の実態把握のための、心理アセスメントを通して、その手順等を学ぶ。
- 4 AACについて学ぶ。
 - ・文献をもとにAACについて理解を深め、その種類や活用の視点について学ぶ。
 - 5 実践授業
 - ・重度重複障害児とのよりよいコミュニケーションの確立に対する方法を検討し、効果的な支援や指導のあり方を探る。

IV 研究の結果

1 重度重複障害の理解

(1) 重度重複障害の定義

昭和50年（1975年）3月の特殊教育の改善に関する調査研究会の「重度・重複障害児に対する学校教育の在り方」の中で以下のように示されている。

- ①学校教育法施行令第22の3に規定する障害（視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由および病弱）を2つ以上併せ有するもの
- ②発達側面からみて、精神発達の遅れが著しく、ほとんど言語をもたず、自他の意思の交換および環境への適応が著しく困難であって、日常生活において常時介助を必要とする程度のもの
- ③行動的側面からみて、破壊的行動、多動的傾向、異常な習慣、自傷行為、自閉症、その他問題行動が著しく、常時介護を必要とするもの

つまり重度重複障害児とは、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由および病弱の障害が2つ以上重なっている重複障害児ばかりではなく、発達の側面や行動的側面から見て、障害の程度がきわめて重度の障害児も加えて考えており、重複障害児と重度障害児の両者を含む幅広い概念としてとらえているといえる。

(2) 脳性麻痺の理解

重度重複障害を考えると、その中核となる起因疾患

のひとつとして脳性麻痺がある。本校においても、脳性麻痺を含む脳性疾患のある児童生徒の割合が、全体の90%を占めている（平成17年5月現在）。脳性麻痺の定義は、わが国では昭和43年（1968年）の厚生省脳性まひ研究班会議で定義されたものが一般的である。

受胎から新生児期（生後4週間以内）までに生じた脳の非進行性病変に基づく、永続的なしこしこ変化しうる運動および姿勢の異常である。ただ、その症状は2歳までに発現する。進行性疾患や一過性の運動障害または将来正常化するであろうと思われる運動発達遅延は除外する。

重度の脳性麻痺では、筋緊張の亢進や知的障害、視覚、聴覚障害など、様々な要因が相互に関連し悪循環を形成していることが多い。教師は、このような様々な生物学的な問題に手を出すことはできないが、脳性麻痺の特性やその随伴する障害を正しく理解することは、重度重複障害児への日々の関わりや、さらには、長期的な支援を考える上でも大切である。

2 コミュニケーション

(1) コミュニケーションの定義

「話し手は自らの観念（伝えたい事柄）を何らかの記号媒体（通常は言葉）を通して聞き手に伝え、聞き手はその記号媒体（言葉）を通して話し手の伝えたい観念を把握する。そして、今度は話し手と聞き手が役割を交代して、再びこの流れが展開される」

※『肢体不自由児のコミュニケーションの指導』（文部省）より

(2) コミュニケーションの二側面

① 「観念の伝達・解読」の側面

「伝える」「理解する」ということに主眼を置いたコミュニケーションを意味する。

② 「気持ち・感情の共有」の側面

「分かり合い」「通じ合い」ということに主眼を置いたコミュニケーションを意味する。

コミュニケーションは「気持ち・感情の共有」に主眼を置いたコミュニケーションから、「観念の伝達・解読」に主眼を置いたコミュニケーションへと移行していく。その関係において大切なのは、前者を基盤にして後者が現れ、完備されていくということである。障害のある子どものコミュニケーションを考える時には、これまでの「観念の伝達・解読」に焦点を当てた指導のあり方ばかりではなく、その発達を支える「気持ち・感情の共有」に主眼を置いたコミュニケーションを大切にしなければならない。

(3) コミュニケーションの水準

障害のある子どものコミュニケーションを考える上で、コミュニケーションの段階を見極めることは大切である。

① 原初的コミュニケーション

気持ちや感情を通じ合わせ、共有する段階を意味する。教師の「読み取り」「感じ取り」が大切になる。

② 前言語的コミュニケーション

表現内容や表現意図がある程度分節して、言語表現の

理解もある程度進んでいるが、言語的なコミュニケーションに至らない段階を意味する。サインやシンボルなどの使用が可能になる。

③ 言語的コミュニケーション

何かの記号で自分の要求や考えを表現し、相手の言語表現もほぼ理解できる段階を意味する。話しことばやそれに替わる手段の使用が可能になる。

3 心理アセスメント

(1) アセスメントとは

支援を必要としている子どもの状態像を理解するために、対象に関する情報を様々な角度から集め、その結果を総合的に整理解釈していく過程である。（中略）方法としては、知能検査や認知能力検査、学力検査など標準化された検査のほか、子どもの作品の分析、教師自作のテスト、行動観察、インタビューなどが考えられる。

『日本LD学会 LD・ADHD等関連用語集』（日本LD学会編）より

(2) 心理アセスメントの活用

子どもへのよりよい指導や支援、関わりを考えると、日々の行動観察等だけでなく、標準化された検査法などの心理アセスメントにより、客観的にまた、様々な側面から子どもの実態を明らかにすることは重要である。心理アセスメントは多種多様であるため、目的にあわせて複数の検査を組み合わせることで、より多面的に総合的に子どもの実態に迫ることができる。しかし、実施の際には子どもによっては心身の負担となる場合もあることを十分考慮しなくてはならない。

4 AACについて

(1) AACの定義

AACとはAugmentative and Alternative Communicationの略であり、日本語では「補助・代替コミュニケーション」または、「拡大・代替コミュニケーション」と訳されている。その定義は、以下の通りである。

重度のコミュニケーション障害がある人の障害を補償する臨床活動領域をさす。残存する、発声や発語、ジェスチャーやサイン、エイドを用いるコミュニケーションなど、個人のすべてのコミュニケーション能力を活用し、コミュニケーションの自立をはかるアプローチである。

※アメリカ音声言語聴覚学会（ASHA；
American Speech-Language-Hearing Association, 1989年, 1991年）

中邑はAACについて、「手段にこだわらず、その人の残された能力とテクノロジーの力で自分の意志を相手に伝えること」であり、「歩けることよりも移動すること、しゃべれることよりもコミュニケーションできることへの価値転換」が必要であると述べている。（注1）

(2) AACの活用

AACによるコミュニケーションは、音声言語にこだわらず、子どもの実態に合ったAACを選択し、一つだけでなく有効なものを併用することが大切である。そして、実際のコミュニケーション場面においてそれを活用し、「伝えたい伝わった」という実感のあるコミュニケー

ションの成功体験を重ねることで、子どもは喜びや達成感を感じ、その結果、コミュニケーションに対する自信や意欲を持つようになる。このような視点に立ち、子どもにとって有効な手段を選択し、活用していかねばならない。

5 実践授業

(1) 目的

重度重複障害児とのよりよいコミュニケーションの確立に対する方法を検討し、効果的な支援や、指導のあり方を探る。

(2) 対象生徒

養護学校高等部（脳性麻痺（痙直型）、知的障害）

(3) 実態

- ・感受性が豊かで、喜怒哀楽を身体や表情で表現する。
- ・上下肢とも筋緊張が強く、疲れやすい。
- ・明瞭な音声言語はないが、日常会話の内容をほぼ理解し、質問にジェスチャーなどでYES - NOを伝える。
- ・ひらがなや数字を理解し、単語単位のひらがなもほぼ理解することができる。

(4) 指導目標

- ・コミュニケーションブックを使って自分の気持ちを表現し、伝達する。
- ・いろいろな人とのコミュニケーションを経験し、楽しんでコミュニケーションする。

(5) 指導計画

- ①コミュニケーションブックの使い方を理解する。
- ②コミュニケーションブックでいろいろな人と話す。
- ③コミュニケーションブックを使い買い物にでかける。

(6) コミュニケーションブック<図1>の作成の視点

- ①実態に合った（使いやすい）もの
 - ・視野、指さしできる大きさに配慮する。
 - ・カテゴリ別にシートを作り、着脱可能にする。
 - ・ひらがなで単語表記する。
 - ・使いたいと思う、身近なことばを記載する。
- ②使いやすい環境を整える。
 - ・車椅子に1冊常備し、いつでも使えるようにする。
 - ・誰もが分かるようなガイドを記す。

③必要に応じて改良する。

- ・対象生徒の実態や興味関心に応じて、常にことばを入れかえ、カテゴリシートを改良する。



<図1：コミュニケーションブック 目次>

(7) サポートシートの作成

対象生徒とコミュニケーションする時のポイントや、特徴を記したサポートシートを作成する。話し相手に示し、対象生徒のコミュニケーションの様子を理解してもらうために活用する。

(8) 指導の経過

①コミュニケーションブックの使い方を理解する。

- ・コミュニケーションブックの取り出し方を理解する。

マーク<図2>を座板に貼って、指さすことで、使

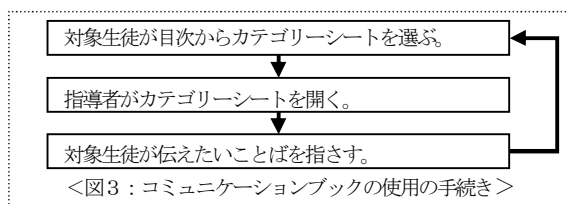


<図2：マーク>

いたい時にコミュニケーションブックを取り出してもらうための手続きを学習した。本生徒はすぐに理解し、離れた場所にいる指導者にも、発声により注意喚起をして伝えることができた。

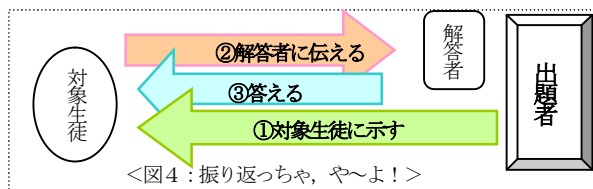
- ・目次からカテゴリシートを選ぶ。<図3>

これも、対象生徒はすぐに理解できた。カテゴリシートの種類やことばについて理解するために、簡単な課題を表現したが、「なまえ」のような普段よく使うようなことばのカテゴリシートはすぐに覚えて使用できるようになった。



<図3：コミュニケーションブックの使用の手続き>

- ・伝言ゲーム「振り返っちゃ、や〜よ！パート1」<図4>



<図4：振り返っちゃ、や〜よ！>

ゲームを通して楽しみながら、さらに、コミュニケーションブックの使い方について理解を深めた。

対象生徒は大変、意欲的にゲームに取り組んだ。似ていることば（おにいちゃん、おねえちゃんなど）の指し間違いがあったが、指導者が読み上げると、それに気づき修正できた。目次からカテゴリシートを選べないときは、ヒントとして目次と同じカテゴリシートのマークを示すこととしたが、ヒントがあれば、どのシートも正確に選ぶことができた。

- ②コミュニケーションブックでいろいろな人と話す。

- ・伝言ゲーム「振り返っちゃ、や〜よ！パート2」

普段あまり関わりのない人とゲームを楽しんだ。このとき(7)のサポートシートを示し、解答者が対象生徒のコミュニケーションの特徴を理解してからゲームを開始した。対象生徒は、相手が変わっても上手にコミュニケーションブックを使い、課題を伝えることができた。

- ③コミュニケーションブックを使い買い物にでかける。

- ・事前学習

コンビニエンスストアで買い物する計画を立て、お金の支払いをするために作成したレジシートの使い方を確認した。レジシートは台紙に、財布や買い物メモが入るポケットをマジックテープで固定した。また、店員が分かりやすいように説明を記し、お金の支払いがスムーズにできるように工夫した。レジ

シートは、すでに取り出し方を理解しているコミュニケーションブックにはさんだため、対象生徒はレジシートの取り出し方も、すぐに理解することができた。

- ・コンビニエンスストアへ買い物にでかける。

店員にレジシートを出してもらい、お金の支払いを経験した。対象生徒は、買いたい物をコミュニケーションブックで上手に伝えることができた。しかし、支払いが店員に対象生徒がマーク<図2>を指していることがうまく伝わらず、指導者が伝えることになってしまった。レジシートが出されると、その後の支払いはスムーズにできた。

(9) 結果と考察

① コミュニケーションブックの使用について

対象生徒の実践授業（第2回～7回）での、目次からカテゴリーシートを正しく選択できた回数をカウントし、コミュニケーションブックの使用の理解について調べた。<表1>

<表1 コミュニケーションブックの使用について>

授業日	第Ⅰ期《前期》		第Ⅰ期《後期》		第Ⅱ期		合計
	9/5	9/12	9/26	10/14	10/24	11/4	
達成 目標	ヒント あり	ヒント あり	ヒント なし	ヒント なし	ヒント なし	ヒント なし	
相手	指導者		指導者		指導者以外		
試行回数	6	6	7	8	5	6	38
達成回数	6	6	3	5	4	5	29
達成率	100%	100%	43%	63%	80%	83%	76%

この表から、実践授業の回数が進むに従って、達成率も高くなっていることが分かる。また第Ⅱ期では、対象生徒が普段接しない人とでも、上手にコミュニケーションができたことが分かる。実践授業の中では、特に「なまえ」のような使い慣れたカテゴリーシートは、正確に選ぶことができた（7回試行中ヒントなしで6回達成）。また、ヒントがあればどのカテゴリーシートでも、ほぼ正確に目次から選択できた。対象生徒の実践授業や日頃の様子から、ある程度の練習を重ねることで、さらに正確に選択できるようになると思われる。

② 買い物学習でのコミュニケーション

レジシートそのものは、店員には分かりやすかったようである。レジシートに至るまでの混乱の原因としては、座板のマークがレジから見にくい、普段接していない人には、対象生徒の指さしや合図が分かりにくい、店員がレジシートを直接開くようなコミュニケーションブックの工夫が足らなかったなどが考えられる。これは大きな反省点であるが、買物に限らず目的別にシートを工夫すれば、対象生徒が自分でできる経験が広げられることが分かった。

③ 学校でのコミュニケーションの変容

対象生徒は、朝の会の中で自発的にコミュニケーションブックを使いたいと要求する場面が増えた。<表2>さらに、ジェスチャーや視線など、今あるコミュニケー

ションの手段も組み合わせ、上手に自分の思いを伝えるなどコミュニケーションの姿に変容が見られた。これは、対象生徒がコミュニケーションブックを使い、「伝えたー伝わった」という実感のあるコミュニケーションを数多く経験した結果によるものと思われる。

<表2 朝の会のコミュニケーションブック使用について>

	自発的使用	教師の促しあり	合計
9月（使用開始）	3	1	4
12月	15	0	15

V 成果と今後の課題

(1) 成果

本研究を通して以下のようなことが分かった。

- ・ 重度重複障害の特性を正しく理解した上で、的確に生徒の実態を把握し、その実態に応じたコミュニケーション手段を選択、活用することで、生徒のコミュニケーションする力を広げることができる。
- ・ 実感のあるコミュニケーションを経験するためには、サポートシートのような生徒の理解を深めることができる道具の活用が有効である。

(2) 今後の課題

■ 重度重複障害児と関わる姿勢

重度重複障害には様々な困難性があるが、教師はその特性を十分理解し、生徒と関わるのが重要である。特に、コミュニケーションを考える上で大切となる、「気持ちや感情を共有する」という姿勢を忘れてはならない。

■ コミュニケーションの成功体験のために

「伝えたい」気持ちは、「伝えたー伝わった」という実感のあるコミュニケーションの成功体験を数多く重ねることから生まれると考える。そのためには、教師が感受性を豊かにし、常に生徒の発信を敏感に受け止め、分かりやすく応えていくことが大切である。

■ 実態に合ったコミュニケーション手段

コミュニケーションは、実生活の中で生き生きと展開されるものであり、生徒の成長や実態の変化に応じてコミュニケーション手段もまた変化させていくことが大切である。生徒の今あるコミュニケーションの力を認めつつ、どのような手段を選択するかが重要である。

■ サポートシートの活用

本来、コミュニケーションとは、学校だけではなく家庭生活や余暇活動、将来の就労先など、生徒の生活全体の様々な場面に存在するものである。実感のあるコミュニケーションの成功経験を重ねるためにも、関わる人が生徒のことを理解する必要がある。このような視点に立ち、今回作成したサポートシートのような支援や理解を助ける道具を有効に活用していくことが大切であると考ええる。

【引用文献】(注1)『AAC入門 一拡大・代替コミュニケーションとは―(改訂版)』 中邑賢龍著 こころのリソースブック出版社 2002年